



70

65

60

55

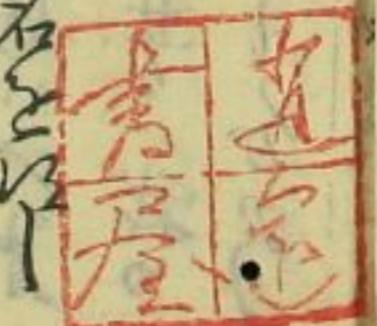
50

三和

うつら夜

後編

歌老詩



芭蕉翁は五十一歳と世を去りましゆる名を以て
號はの西翁もふ十二歳一期と終り又はに
末二年の辞世と残せり。よし虚弱も病あるとれど
年もうとて今年ハ六十才秋もうちぬるが
中納言のさきへの逃るれど生はいつまうか
よせきとよみと歌ひれどもやうぢかるあと
あかくさわせに立ましとぞれども
もくもあくゆきてねじ苦れぬとあくじとく
よつらうきてよきへよりやうせとくとく
よもよするよくとくとく

火とすやまやさし當財のをすり泡とあらゆるがれ
行ゆ行ゆとと相向景向としつゝうて松お撲
も拳済もさきくせき遠ざれを奥のうよ只一人
火燒涌きのぬかとすりおもひ、あらうと
とどきよ生る人すとホーとれへいてとものう
一けうきよあじ六十の聲をまきみすと山國
乃軍にしうふ十の聲あういとえのゆの
舞ト馬にさうりうつむき志と歌とすやある。おも
津うりむかく嘆苦はうのよまくいとめとす
老人こゑにまくとくとめ、かのゑあくわいな
よ面向うむとくのれう面高うめく苦に我
西ふり一あきうちれぐもむうとくねど我し心乃
よ一ひつきおのとくとふかととくとくとくと
おの老と若生とくれもありくかくまくろ
おの老と若生とくれもありくかくまくろ
あまほ色の下にあやまうとくも生てんされを老ハ
よるへ一え老じるへうにうの境きつてにせ
うやなす蓬萊の店とくさんに不老の薬
ハシとゆう不老の薬とくもあらといくとく
一株よナガシうとも不老ともあれと何うせん不老
うとも不老あはす。うとも不老あはす。神仙
不老のうともあはす。神仙不老あはす。神仙
と薦す刻とくとくとくとくとくとくとくとく
人よきうのちまひあらや萬ゆうじい四十

うのせきをもとよひよひあまくらうの
稿すりともひー七十もいりありまことよ
うやまきとりあり漆の耳みやうらんと
おのとくそくまふ不用のせ詰淺いよひよ
まくらんと此篇こよみと拭と

四聲賦

其書画は美中の沙沙シテよあひ評
あきまへ名とて海もよ夢ハニモウツの
矣ありすかじこよハカムレニ居者三人のす
エレベニテ十と行よ五を基に二十本絆のつを
きりする巻のね風をやうひくさうし難
クを接す言ひてみリハニテナヒに
のむせんと鏡く月く坐すか似りう甚よ
そり人うそくわも一きくこひ
るの多念想する士ハ今門よ腰と折ルをの
つれとありせてもむき傍ハあすの米粒のあくあき
すとぞうくえハ入口の西に迫く膝の上すくさ
入キテソリ一地と造りもよせおーてとねく
蚊のロれゆ申とまく葉を糞手儀のけと尋
くみハシウ^序のあらぐくを常と云ふのよ觀
大體番あく吸ぬいつのちようこちをくらうえ
ほとしきとめうくまくのふとひをそれと
候よすうにまく寡子をあくよ仰

の端紙の斧柄ハシハシと大根孫オガタコにあひて附入
年月の別あらう吐とすのひとすちアリルハ
大きも手損ハラメトヨヘー我ナトヨリ不様根ハシタケモテ山槻
とあらさりあき恨ハシタケモテ山のつハシタケメテ
テトニあらぬほハシタケキモトモトマモ上ふの人ハシタケ
又あたのミキモと深ハシタケ去篇ハシタケモイヤハシタケ文殊ハシタケ
万世ハシタケの後ハシタケモトムハシタケ一ふりりくる人ハシタケ日用ハシタケ
ヨリヨリ用ゆき或ハ文庫ハシタケのままで何事ハシタケ何ト何
以浅行百句十文と定家ハシタケアヌマ法ハシタケモリトロ
又ハシ利分ハシタケモリヨウラノ著編ハシタケニホトキモト文
徵ハシタケ、後ハシタケとのフニシキシゲモキモトテ外ハシタケ
ある事ハシタケモセラる事ハシタケモヒリハシタケセモキモト
生ハシタケモニヨモハシトキ安ハシタケキモト要ハシタケモヘリハシタケ
能ハシタケモトキモトトテ一宇ハシタケニ宇ハシタケモ用ハシタケモトシムハシタケ
テハシタケモ似ハシタケテモトヨシモハシタケモ又画ハシタケモ伝ハシタケ乃
品ハシタケモアシハシタケ一絵画ハシタケモハシモトモシモ經ハシタケ
乃男ハシタケ、瘦ハシタケくさりハシタケ大は繪ハシタケのよしんハシタケ肥ハシタケく衰ハシタケ
うき世ハシタケは又平ハシタケに好ハシタケ菱川ハシタケモ守ハシタケ今西川ハシタケモ
シハシタケトシハシタケ一絵筆ハシタケ毛ハシタケ金風ハシタケモけハシタケ牡丹ハシタケモ
め花ハシタケモく人ハシタケモ大きもる難ハシタケのむのむのよと
うりハシタケモ同ハシタケモ人ハシタケモあれ又ハ散ハシタケモトシムハシタケモ
遠水ハシタケモ波ハシタケモ遠人ハシタケの目鼻ハシタケモアシハシタケに帆ハシタケモケハシタケモ
舟ハシタケモ船ハシタケモ走ハシタケモアシハシタケトモリハシタケモ
俳諧ハシタケの繪ハシタケ上ハシタケ下ハシタケモづけハシタケモアシハシタケとて爲ハシタケモ

詫と申すにて、我レ我流の手ぬぐいをもて壁
絹の裏贊とひき綴蓋の手ぬぐいアリカ
モテテアリ。耻もアリ。モカ
おらシテハヤリと吉田の法師と申すある高僧人
ナリ。四年以降の浦ヨリ遊す手ぬぐいアリ。

医店辨

箕山の月ハミナリテ、ヒトニシニ五湖のあても済
ムテ窓ノ垣ハ紫陌よ隣キテ、大屋の宇
子アリ。葦ハ茅稻の傍よアリ。れども小屋の
渡敷よりも淺一さめ。昔の宿者をやすよ連ある
人の世にちよとむつりツアリ。仇ある人の敵と當
てまく。名をもへ。もちと身ひり。傳ひき
仇もあき人の多く。多々金。肴板と出
たりと同へき。のへしと。あき人。
アシキ。せき。しゃれ。おののかく。かく。やし尋る
鬼のあれ。もとあれ。さと。うき。せん。くわ歎ある
中くも。きやせ。とす。りやせ。に。宿者方
ニ。す。金。とみ。と。み。に。ち。き。き。明の月。ま。こ
門。二疊。用。さ。セ。か。る。人。よ。あ。ー。く。と。り。そ。う
と。い。ま。ア。ク。す。ある。医。店。ア。リ。お。と。社。を。あ。る
と。生。す。す。こ。そ。う。る。医。店。ア。リ。ち。ち。ー。く。と。人。も。よ
あ。り。る。は。じ。き。れ。後。せ。す。す。き。よ。る。人。乃
あ。佛。と。こ。ら。へ。か。に。て。こ。も。く。な。す。と。け。ぬ

ヘトモもあつて余つせあき人ハ初の至寢のち
ツマード館ケモ次第にまじへくムー俟テ
ハクシメ申テアリニアハ以キあうれもとあられ
スモウシテ御中の清少にこゝまをとさうく若
ととリツヘ一塔ニハ仰み人モアリ一花山の上皇モ
タリシキ名ニハミセキヒトロトヨシ少シの神灵
モリシケ俗の諺スルナリサレトモリシキ
シトアレモ其の妙ミモ申ハシクセシモリキ
トニシテアリヤ我ガのトシリツトモ吉陰モ
すリお洋ニシテスルヘトナレトシモアリト毒ス
薬モアリナムモ人モアリトオトモシモニ毒
のアリシキシテスルカトウリモ思ひあらわ
セヌ人ニ我ナアリモ口ニ癌ニシテアラマシニハラルシ
シテスルモアリシテモトメシテモ名より莫
ラレルハ苗郭ヲ等と呼シ此易のノムノ
タキは老と病と一筋にて一き世の間ハ
出立ムアリちれど誰とあられ何と耻とあらハ
逃るムアリちれど誰とあられ何と耻とあらハ
桃ノ菖蒲ニ神ナリモシテ又半顯の門松とテ
ヨリツアムハリトモシテアリトモソニ詩
トモ道せ者と「ソリヘクシ」さると押ケテ居共
モトモリシムアリ名前ナリモ承あきせ乃
通称とすてけ竹桃町のうちすも多幸ニ

叶ふと益ふきすりあらざるをとどめ
比つてのむすみ市中の門前で湯若某とある。
家れとみとこもとちもく同様の花火が
うなづみのよしにあらわゆる所
さつき宿へりす乃とすうじに人よきてとある
と門あまく市中とまよのうき世よすやす
おくれ又御子はまくとて家とまよ
門へりとおまよくとまよう。湯若のれよ
りととまよくとまようせのうゑおとづ
食傷アメシヤとおとづる所とある。

四角ある注せばなるはまよひ

利發辨

生て天地のるるのせあらて夢あるへくせ
あらて後名ある一トシヤ世とのむくうき世
の名とあらまんまよの姿もつあらじや今や
さくさのせるとよかハ神像の本發うや似たる
釋氏の剃髮者やあら人と模稟のよせどす
うとあらまよ生道の仕上あれも一大事のふ別
あらまよくとよかとよかのえまのす
あらまよくとよかとよかの自由とぞす
えあらまよくとよかとよかの湯原とぞす
えあらまよくとよかとよかの湯原とぞす
りあるとよかとよかのあらまよくとよかとよか

さへとくのむかにけのの所うりを済に江中
もよのあらはひやまみにわたりるより
樹と塚と林に波つゝもしらむよ活る
へえとひととて心せひ定づゆる刑と
ききよふも通じて遍歴きよみくらまちゆく
ハセにおまむとむ官路の険道とあきと一功
とある名とくにねうちすれうきく耻もきく
うるを此老のえりとほ世の塵と刑もつき
いくとよとおまくらんやうかとてとて按のひ
うとよとよもひせきとれどり傷者の氣など
うへあきう穢嫌のうねハ父母の遺體と
の外うあるへてと朝の奴と喧嘩を起す
ニ世の夢よ心中とつて我ととめがと坐せり。
とくとくとくのを知にきくとあうへとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
われて爪も筋からはるかく鼻キテ
蜻蛉のうきとつあきてくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

少しきにかやあらしとくらへるに壁者も身を守り
利こうてまそはあらぬよりもすきて
まこめるがる世の八葉町々ハ郡の山中子の
比丘尼さあうてはるは僧は塞り入るやうな
ハ紫のさあゆきるの朱どり奪ひんともあれ
佛もあらそうの自利もて心外子性はいたのせ
ゆききしてさあぬふりゆきて入道てよし
くく人をなゆて法師するあらば御門てよし
せうあてりあいせのあらひもて字義よはう
りす湯茶うりと沸せくらひのちに茶籜と
うちれ葉うりと用も玉露ハ茶を人の名と
のうけられて名ふれど空くわすくさあは姓やのとく
かくまのへてふしむぢゆり入道の号あゆじ我を詠きと
す法師とすよりよしく人にほー

利こうて月よきと影は

自名うへ説

遁せすがゆうて生すみて、じきせすみす
あーするときニ字ふあくはやと名とぞい
字とぞくしれすが父母させにあくとあくと
詔せしれと忠まの字とあととくじゆのまくと
くやいよへしよ又四書十之の教すあまゆ
人のもとアリてゆきまのこゑもあくとあ
くる尼者めりゆきみて骨うりに立ちじる。

まへ博識の門よきや意味はその二事あるとあ
さるよされどもまへ年遠りかとありて同
すじ人のよきてかほの意のよきてかの如乃
詮あきかねすをもらひきのゆゑあつた
一人／＼よ講歎ぢんざりとひつゝ／＼と一善哉
の多く殊々と西念津蓮寺とひそくすゑ
そせの人のよきとみに今がとすむをよ責らる
万古も不すとのゆゑと御と下女坐もあくま
フケアリ元氣／＼名ふる人よきよきのゆゑ
まは／＼調布先女もととく姫す姫もとま
すもとしとけの人のよく消えのよくすきを
いれのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑ
をも／＼擣小手とすとて自らとすとてまはる
手叶／＼よしとす／＼とす／＼

鍾馗画譜
至と／＼ぬ家もあ／＼いつた思とくよし
素人絵の懶よ／＼あ／＼よく手よ／＼や
疫井除の枝よ押せ／＼い／＼よ／＼門とまわる
其劍とお少す／＼つよよ／＼鞘とす

うへるはの里にせとのれと秋の月にかく
まちうむすらぬ山勢又眺をくぬあきよひまみ
アシカヒテニナムシト我もどい人もやつてゆく
まふゑにぬといまくとりくくもあれともゆく
のゆきのさすれくく林下あんとうく一人とを
とくや詩かきくいあくむとくとくまくとく
りせくあくせくちくわもすくとくとくとく
月のすくわとくとくとくとくとくとくとく
書をうよくじきのまくわうれすとくとくとく
より雨とほすとくとくとくとくとくとくとく
の行ハ半傳の傍のほかとくとくとくとくとく
因の天のまくとくとくとくとくとくとくとく
雨ハス穂のあくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ひやりとくとくとくとくとくとくとくとくとく
てとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

主計の事はナシナリ

勝説

世を捨て。法師のやうな人をより友よ以て。も
ヨケふキ、かじらむ。まそはまをす。一軒乃
あけも嘆氣にまくらぬき。薪も木も。て
おぐ、友のうへうせき。きゆう。あり。うきのう。
又うきのとちこも。くもくみの。越あきと
ようち。アラ我ばく。世を捨て。と。きやく。乃
縁をせく。て。まの。ひ。よ。や。ち。う。め。い。り。と
凍餃の。患。ハ。り。し。す。こ。虫。干。レ。煤。を。年。の。世。法。あ
り。う。り。と。ど。よ。そ。ト。の。の。と。ど。り。す。し。
ある。酒。え。り。そ。う。口。と。限。と。只。一。用。よ。せ。の。ま
と。し。と。り。と。い。一。あ。と。く。も。用。ち。う。ひ。と。と。ふ。り
ぬ。よ。ハ。生。起。よ。あ。く。れ。と。る。煙。よ。お。れ。た。と。ち。る。と
ひ。中。ト。湯。ハ。潭。ト。火。爐。の。じ。く。ハ。是。代。よ。是
の。一。色。リ。一。色。ハ。火。爐。の。じ。く。ハ。是。代。よ。是
の。火。爐。も。ト。今。ア。レ。ト。火。爐。の。じ。く。ハ。是。代。よ。是
の。火。爐。も。ト。今。ア。レ。ト。火。爐。の。じ。く。ハ。是。代。よ。是
の。火。爐。も。ト。今。ア。レ。ト。火。爐。の。じ。く。ハ。是。代。よ。是
の。火。爐。も。ト。今。ア。レ。ト。火。爐。の。じ。く。ハ。是。代。よ。是
乃用と。ア。リ。天。ナ。人。と。る。ふ。ー。人。と。う。う
の。名。と。あ。と。因。と。う。に。う。む。は。因。果。也。傳
よ。の。せ。ら。生。く。昇。帳。せ。ま。の。い。せ。也。も。う。ー。う。う
大。の。モ。あ。と。う。す。あ。と。う。ふ。あ。と。ス。ア。ニ。モ。う。ら。と。取。達
の。事。ノ。一。年。と。三。綴。の。ノ。う。と。さ。う。う。天。の。年

ユ則うそ聖人曰く土より生むる者の中
猶とよきの事也れどもまことに衰のまゝ
とあらば何の益もす。豈かくへそへく不審
の聲をうへし。今に身をうへてさへぬ程
天地萬物の財餘無あきよ。すの世もあらへ
クの御りふといふ。我らの身の不肖といへばす
然てもまひ身をもまひ。又にまひこのつゝめ料
紙やおみがはくを折りあらへ。さるもまふ調
査のつゝいはは仕出の匂流ちうへ。細工乃
面尚一うへし。人へのつゝいあひのまゝと
トキアレハと被る。すてにうがき事へ。かく
うらうらとやのつりり。わのうぶくとてうらうら。
うらうらせす。ととせす。とせす。とせす。とせす。
とせす。とせす。とせす。とせす。とせす。とせす。
とせす。とせす。とせす。とせす。とせす。とせす。
とせす。とせす。とせす。とせす。とせす。とせす。
五侯よりお軍まへつらふ。あらわらと
猫ハラム。とよし。とよし。とよし。とよし。
とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。
とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。
とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。
とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。とよし。

モロシヤ

争不妄文

鷹六社

老きしやまにあざきをもむれ公をもじに魚
あさかと魚ふかとちくに君と女と失ひて
西風の涙袖と涙一色霜のつゝむ襟ふ満た
うそうううううううううううううううう
ハ例の大命と浮き高らかやすらかうか
老妻のあどりめ只あまくよあどよとある
かくかくかくかくかくかくかくかくかく
やめせまむと鶴うるゝ言ううううせせせ
とむつねはるうううううううううううう
折ふ悲とよまく黒い出火のうじく煙と
うううううううううううううううううう
一とく煙を吊つるうう我らをきはすかのゆ女と
先づくわざれがもうひ我づくありゆ君又モーき
我と家とへー我の魚みて魚とりむほあき
ちーーーーーーーーーーーーーーーーー
やくやくにあけよみれあれに私すげてふねのきめか
うううううううううううううううううう
チ行ふ城一石千の裏をまたハ百引やく十引あて
やひきて一周忌のかい餅ひよの日のその獨樂野
とすれ糰つけく完てうとよーそれとすれの
糰とすれ糰とすれ糰の日よハあくまーその糰
すす糰とすれ糰とすれ糰の日よハあくまーその糰
すす糰とすれ糰とすれ糰の日よハあくまーその糰
すす糰とすれ糰とすれ糰の日よハあくまー

年をも見ておもへりて是とあらむことをもうか
つみくちよふとあらうとへるわれ今老い詫く
の世の倒の別あきそむのこせりまのむら思とあ
てりやう捨すあれまゆふばにうちくと四女
乃無きれあきくうくまくよくはきくはなむ
まことすとすみハラモ雲我今先達のれり
君とくまし君まき生達のれりくめりあらの君のと
とうさむじまきよあく一冊くまのすくまくまき
あくまくまくまき

泣の原先へとくまく秋のまく

賀浦波茶院詩上

大極の亂ニテナホサセリく津陽とあるの邊隅の
又あすまよ支那いそのあまともあがりあすま
叶茶院のまよにや角のうままきのまよと一
弓矢くき明の盈虛を示し舍者定難をおいて
歎するもの又あすま佛も我をおゆふ手縞よ
けすよ文あすまを我よ求む我田先生の言ひま
ど駿ハ壯あり時一夕千千里とほ老と云ひ駿馬
も生えうとうと駿馬の老くるのむのしゆふ
きとて一人のお事ありうこうにまく求ひ一
あおうとくよすかねほつみくとあくま
告く我ハ火燒の山にゆきゆくとす其文

成なり娘の茶碗のあやぢにて懲りくいよ
と敵くらきよ黒く金毛の響きあり憲け茶碗
の口年をかけ文あゝとあざかの左刀ほおの苗
ひの暇あつて暇あつて徳用といふもひすうひ
姫娥、天上の葉ハリカチアモ人間の石うりと
まのあつむ

ちあわく縁けもあきらうけ美衣
破れ世半よあゝひきりき

贈平菴丈

平易といふうる分とくふうりと詠ふまし
ゆきすれ菴足もあればたゞ呼べ餘益と
さむへき垣越のあすまうりあゝの徳乃
孤あまなみや隣うそ杆のこゝにて建あひる
ハトとやみきんむつゝとややよつとあゝせ
かばあもとされと東西がすとのやにしへて正之庵
ともも月あら巻ハあすとあらま度々室の
きのハ一町もあらむとるへーへーお匂をとくまと
えりよ四时のむ景物もとくとくとくへー
さふと産をうちさげーとあらわしつきあらりまく
く只服あ乃婆とく

繪の中にもとくまのあ

とまく下をくに掛もーの自由あくまの田子
もとまーえはあ苗を秋ハあくとあくと大根

リと生きるゝ事より一物四用にあつて何處を向
乃ちちきをへるとは枝の邊にあつて
てあくわくするもあらうと

勝頃

緒と不用のあくわくと、我り詩マテ人のねあら
その一才ハ、そくそくモ一人ハ、そくそくモ一世にやくあき
ゆくともあくわくあくわくと、生あるへくせうの
緒ハ、おもへ、今よ素琴の詩より、さくへ、わやへ
よ之緒の聲をすなもすこうせにありて、おと書
ましの仰るへくせと人のち體又不用と論すは男の
意氣ありて、いふる聲をすなもすくせと、そくわくと、
こくわくと、そく拂へ、接ハ渾沌玉の面びげてせま
まくふきよめある、一いつの緒ハ、極だ急急のをも
とあるあくわくタマ一朝アモ緒のをもすよ只のみ
ともみりいさんと、项羽山とおぐ力とけ坂を
おもてし忽々と、痛悔緒とかじと、漢文の
古事記、我朝よ人を嘲とて、緒を笑ふよ
ひうどくちくにつけ、さほんあくと、緒をと
よと海と、う天津主の呼ぶ神と、み
うていうでこそ折れと、あくわくと、のえ
つよすハ齋藤季の狩人を、あくわくと、のえ
むのをよろて、緒の緒又泣年のをよ

情向志神をめぐらせりハ耳も及び鼻もぬるを
ふれハく風移す大功あれをくく我めと仰よとく
いたれど御ハくらむてまづくとむれり又
御の下からんハ何とやし場不すとむれり又
ひとまことに天にうのゆゑく往くうの御あきこ
あれや上トの御定ハやうてどすり只う身をそは
キ

おととし御わざり秋の事

金嶽樓記

桂井きり成りて金嶽とよみハいよ名をき
富士山むかとまくらへて山ほの廟とまほ南望
ひうちてわれてかの金嶽のうあさす里を畔可
内田あさササア村高あさサ社佛閣のうるより
あさ西に仰く画すとて竜興寺よお寺
して花あつ雨と僊^{ヤハ}、桂枝山の猿のよみすとまき
日と暮く下戸を解くつゝ名とて蓬う島う
既とまくは上戸ハ酒の申うをせひと鞠う池う
誕と流う——やまと主ある文章に寫まことよ
あり遊ふある一時の英才うて新詩百篇瞬く
うちよあう雅談一回あくびとあらじあやめの
花もうよ向ひマタモ香と鳴^ク、天津^アの夜是り
うと余てやふ字くらむしむれ神かすくまき
まく詩歌の聲ひよ餘りとおまえ俳諧の

又と清く是をいふ事無くかんせ破れと捨
てふと詠きあくとすとて縁と辯のあるこれ
より不才ある何とぞ御ヨモテ行とニシテ灰汁
よ代ひされどり我望らるすありせし祭の桜浦の
幕毛邊と縫うとむらんに權を一日の間もさす
ハ其のうすめと勤つて云れもありけりゆにうせと
叶桂ハ久しくに松樹千年のえときを期そへ
ざらハ久しくのり勤つてあすも時へ
名あきとあくちゆれをすとちゆとせ
当代の齡とすり辛みけ桂と蕭とせと軍に
がりて又年紀とすりや我方す幸にこうにキ
リ一ちゆのまことにはなほのまのまのまをア因ぐ

其日の供はいとへうそと

月差よが生て士の日

編笠贊

述を汝山の玄々くらはーおと蓬生れはひにまー
てお浮せすう通り通じたまれも朝ちうへよす達りうや
あゝし蓬莱の浮かぶる畠の林うる室ハちうす昔
時明うほれの松樹を傍そくせたに編笠といふゆの
あうきと戴りぐらむる時ハ車馬経こゝる市牛をあけ
とう人我をあうそすて朱雀のタクルれ日半燈力
残りうあるやうとあきんこむあきんとまよ進ひ常安山
のせううううううううううううううううううううう
きハ半燈通用の室うして今泰平のせゆみが冷

きしの塊々其徳もて優生うとぞしある
女は生家より仰念をもすいとよみ
仰めあらんと仰ゆる仰ゆるは一達十部うけむ
生まつてあらうかわさくう猪丸をもぬを頼れ
カナホの手すりとまれると茶母の焼印ハ重太納
のあまきねりやキノ幕中を招見のまへせよ
所で思ひをりて草帳紅添の内まで腰とおおせ
暮あわく令旨のまことにほひくつれきくよし
そ終てうれう漂泊の旅因とぞうきくや只ひや
そりお母へくもせとお出でよ拵編笠と寝衣
ソリカド被年と奥衣の年を達とよそゆるもて疾風吹等
されくし異國ナハシキとすりかず筋道ナキと
尼ノ木と漆とくして床とあく伯休ハ藁と臺山
とも女もよそくされうりうりとや我矣ナハ
此の一蓋あは太陽の徳あくまよ安くお布
医トトト

編笠の俄尼者也年六布

幽冥記

男一口のいまとひりあく娘やのやうくちづ子幽冥
うるうるする者とお婆と年一絃にあれニ角ある
紙といふとき度袖のゆうへ行杖とつき縫はず下
うすあとあつあつあらうあら圓は赤やト子細

ウタミハ雄幽灵ありカレシトナシトモニキルモ
唯幽灵とあるアーラクハ行持の傳手をもつて布施
キの徑を教え或ハ剛ある侍とアラケトモヒトテ
カクカクナリの身カラキヨエツルトセツヘ
トキノアラカツカスホのモ幽灵のヨリモテアラカ
人空ニ幽灵の自由アリハ佛事とはぬ亡者莫ハ
我レアラアト語る事ハアラハ勿論
ヨリテ言葉一語中空のこうみ達の般仁の高居
トモカルも之達の子ヤアト生々く妄物の實、
持よヘキをアリ世のモ消ムニシムヨ世キモ
幽灵の如ク稀アリハモニトモホコノメアの世の様
トモアラカツカスホ招請シヘイ表フダリモト外
フモトモれやアモアラシト何の遠慮無、アリキ
モ付レシモタマハ近ひ火の身起ヨリモトモ申
タマヨリモアリモ近ひの伊達達の中へ經ヨリモト恥
アリモトモ幽灵と申ルトモア世俗のモアハアモア
アリ出シトモサマカの幽灵モ泥ヨリモトキリモ
故対者ナリ

誓モアシテ幽灵消ムモウル

校の門序

季真ハ今之巻を解き祐乘ハ洞の猿を駒て湯主
室一風流の才をもつてゆる湯主ハ云々この詠うを
ういともう雪の詠よま事なりとて此壁の
おふ又六う名をもつてゆる湯主宴がとうとく
タヒタリモミノ名ともいひ挂てこよ湯主の折
えせあうりてのあくまかくとさきあくま
あくまかくと極樂の出店としらすあくま
あくまの鶯の所作とをうせす此得素と附じ
て櫻集一部をせひうすあり口を湯脇のを
あと同ソと向巣の方人をゆくとよねとて
此店のタヒタリモミノ名ともいひうけゆる
の一つあくまに壇子とえもりとくわくわくと
呼ト始もなく人をよそに腰をの園子ハ七字の墨
かくやくすすきと書くと腰をの園子ハ七字の墨
門の極樂とあくまと杖子と杖子とくはん人
迷ひもすとじ只己ののれは所の上と腰をの
まくまの湯主の湯主と駒す

月光のトテとあくまとや湯主と

雲時郎彦文

崖跡ア西面に把茅の一序アイリニ作る小巻
江原山のうすとあいてとくとまこと詠
曰くせあくまとくとくとまこと詠

そ必佛あり我も甚ほきみぬさるゝあゆ
如人よ津刹の多く胡々數十步と方セズ
一處併よ向ひよせんすり安ノキト十方僧
乃遠ヨリとくとアキテヨリの佛とサケニ庵
伊様ハあくとあくとあくとされ此あくの古
イ只廿五度の像一軒と刻く新よ度の年
とくうし我生涯あくら生遊子不もくともふ
偏よ甚つの俳諧あせもくり聖言経讀じのう
讀佛經の因とあくはとくのうるをかくす
因とまのゆゑをもくすや我もとと賣家子
彦小と者ハ十旬なるにてて而金を亦あ
シヤウヘキスルハ一圓時金の十二分強よ
一き洋をうれしき世の朝の李とあく茶の壺
のまひよへどひと一年の金ると定め同志の友を
こゑいと一巻乃承をちさんとあく表アハラ下
ヨ此道の光いやまよしけりと參奠スミと、充望
へくハうけ報謝の志シテよく後のせに残をへーと
の度ううし乍生の如く我ゆき同調の志シテ
ううつきあまよまとすにうしてと度シテ津
よりせうて行シテ拂スルアーハ

金石記

金石ありにのゆくあくとせけま

あア虎の怖一きあうり仕出るよきをよ
虎も鷹も人ありて安よき人の心と安
くらむと云ひ石よ草一け名とばよへた
とくとくうきハナ壯のじのぬにせよゆき
えきく々くらはれ垣のあくとさをあくと
いの家とらうとくとくちくとくと
谷遠く語ことくら一つの巣穴をうそあく
此名のすみとくへ一語の記を誇つるあく巨靈
あく壁きね東山の無公の御よむと縮く
あくりんむくハ文人のソレナリの糟粕あく
やうよけはハ猪塗の名あるのあくとめあく天
神ハネモアリカニハアシテナシキ子の母と学
く付と石す削りき日騒のくのまくはく
あくんきへやアドア風船にぬけりと文奇の
座右よあそへく詩に和音よ俳諧よ只知らま
升陽とのつむあくと
波とくにのあくとす

悼子禮文

そみて十人の友を失ひくむかくハ聲の声
くとくりあく又生のまいかへ一うき計
老く一人の友の聞るハ歯の声くまくす
生ひゆるまくとくとくとく歌くらむと

えへくちゆる子れ爲山體角のなるあまうお
まうよけを一とい仕事のうへと遁れぐと
強生と風船に寄をもとの友よよわるふも駄也
の生非と諦せたりうき人の毛絆をいすとく
かきゆも知るゝ如くおさゆよ下向と耻を
きくきほすれ經すりとあるくちるくよ称嘆
きくうやせの惜りゆ尋常よろづ
アシテ因ー老のおせ恨一々へとくよもとく
とひのこ

魂きく秋暮し厚むよきこれ

六十齡後

上書ハ百葉中奇ハ八十ト書ハ六十ト蒲紙
も窓の外のりて六十の齡よ却うの昔の数々
つゝあくさんよ、其のてる家はあれども日々
乞食の人の笑とてかくはげりうり姓す
妻うり男女のあくよきとわらうがよはうき
とよきとよきとよきとよきとよきとよきとよき
年老とよきとよきとよきとよきとよきとよきと
よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
我ハ五十年をもへばとてす笑ひと
六十度よやまとのうち紅葉

おま頃

まくらとらる利川アリマラムシノシ二番國ハ
字奈レムヒツトヘテ有ラムアホホホホトシムキ
五人の妻をも解ニ及メトド媚を求サヌ自家の
名ナリテ俳諧の心向ヒテモリヒト經ムハシテ
リ此也トモカヌ在クハ歌合ヒ示稿の中モテ原
述のりシム如クタクハ歌合ヒ申キテフミヒ
シキヨコアヒサ歌狂晨ハソミヒテナシ清よ清アテ
ヨウ蓑一ツナリナキヒ送アヌ國の雪ミハシメ
ニヤヒセシテアシムキシモトモトテハボノ
カムリヒト候リ以の外のアサヒツシヒ聲ヒ寒
ノリヒトヒトムアムトシキセ経ヒトリハシ
ハシの風ヒトムアムトシキセ経ヒトリハシ
必盡モアラシヌ赤ハ多病の松低きヒミラヒ
ヌカヒシモアラシヌ中ナリ駒高ヒシマヌカヒ
キモセヒ不用の角ヒトシナシアヒト人モモカハ
カシカシカシモアヒト人モカシヒシマヌカヒ
モニナヒトシナシアヒトミナヒト不用ヒト地ヒ
塙ヒシラシヌモニナヒトシナシアヒト不用ヒト空ヒ
金ナシカシヒト不用の用ヒトシナシアヒト空ヒ
ナシカシヒト不用の用ヒトシナシアヒト空ヒ
ナシカシヒト不用の用ヒトシナシアヒト空ヒ
ナシカシヒト不用の用ヒトシナシアヒト空ヒ

子仰ぎまきすをと左もよと寝てあはよと働き
寝うても自やのうつきとすりとめつての辻
とまくと防ぐのほとうもすみの麵のう
てせんとうくわとへ常よ列と坐とユムの
つるへーれとこうじもけおもと引うりて
蒲まよあくまよあくは不用の用とくもーと
とのきよまくへる

うさゆゑあく神の神

與舍敷子文

あく人と寝てあくと寝て坐て承庵つら
りあゆむ駄くらと自らの身うすむとあらま
然と友かきうれび志学の娘うりに千のしげよ
わらうて獨ど只沖の石れふくらすあき生庭
も苦の人よせひきまくとあくむた敷のうまと
鉢をあへ、辛じの秋まくすやうとてうは
いがるけあうりのまくのしよ獨り辟うらき
辟うらうも面白きわとと世経と年のえぬむと
さうてこへせのうや人の疎り歎だよす捨て
おのの意を破り蓋と辟きてモトモトテト
ううううと圓くら葉あくのけ人の痛欲せし
わと下戸ハマラカイ上戸仲ちよづをもとく
ハ金もつくるくら絆もせかくもあくとくと
きうよきいへくとおもと當とくとくとゆくとゆくとゆく

やうにされし机のまゝより、あとと経て落成する
二月の元より、紅枝柿の深き甘れようゆる
味、蜜砂糖よ落せるごとに、生れうるのトテ、
はぢてから、のまきふらり、娘の巣よる
金くさくは、きの聲をし、金くさくあしたす
羅を拂へきに、委々と甘あいと重い芳の辟邪
玉ハ既とさくとへ、と舍敷のこまよひく
なるよ／＼

賜不夜淨印文

アレのうすくわすな家並み、蟻垣明よ、
栖かねて、樹下石のままで、されど、傍をせ
りそめあり、うる、ぬる、空もあすむ、干も、家
のあつて、あまに、うらううと、あくすメ、表の
まよあくと、お表のあ、捨まよ安、津や
津望の大志あくとも、只サ龍の雲はつり
のまく、辛よだ中のあよあくと、あくよ
我あくよ

つとまゆ寄ふまく一鷦牛

漫老井賦

瓜苗よからぬと、正月のあめと、献毛と、

華清の浴亦ありあり事とよカ一ハツミ
山中の清りあらんしれハモモの遊いよホーホ
ほ者の多をと助くかねまつすこふよあす
其二のうちに湧出する温泉井あるものありこれ
布袋庵の名水ありてありハカクモミ蕉つの
俳諧より人うき昔よりの傳にてて是を
のめ湯あり天と風雅と感一て號は此井の名
もろてあくあくのこよゆらひやかくう其名
うにゆる年うつるまわはさらよしてえハ葛母
湯くら箱の歌の湯と詠へ新ハサヤケキ日と
うへその家の茶と薬とも冰と敲くまと
うけ四付の温泉をのまへてあらとーす御
ちんゆ温泉の名のじゆくまるとされ
おせんといひ食事と飲時ハ皆す全と賄ふと
はけ井のあと甘かくへば併合を風雅の場ま
とも忽三石のあら茶とぞ

岐嶺賦

本名岐嶺吉義大通角

信濃ハ多々を屬ニ傳すり承りよ岐嶺の山ハ即
封疆の内より入りうりとよめの巴く美ちるありこ
そくすり草原よあるてに其地の山川勝景を
詠る清りくくはす清すり甚ふくとつねて
賊と作生てあれいあるハ文武帝大富二年始
く此をと定キトヨリ今や西東両都の通語也

とてすよとよの姓をもつてはいざまことよそに
よしよてうじるがゆきよすまきの宿ふるあせは本居
家の四居をくわべて拂散とむくるとせん酒家
上松湯山ハ山中の一都令別巴笑もえよもすう
ま、越前新風、櫛井の里、贊川の宿をく
十餘日驛亭をまかぬつきく、また大名の旅ぬよ
か陣の幕をも翻り、馬の絆れすすねとて
今ハ推のまてうる石自すすめ、あくわく此山生
きまちも平子の坐女のふとよきよくは、此
駒のはまくすうて、淫靡の風を恐れきづるふ
仰昔ううの法令あくすめ、家のうう、深山
幽勝三事の様を憲、初おほり萬能、時序、せせと
遁けり、松木の木の深くて、すずめ、とよみ
しも生む山中をもひく、俳諧、筆山池と連
みかはすれある所と、よきの、五叶、林翁
すくとやえう、朝日將軍の興う、古今のころよ
峰山あり、湯山の奥、深きよの越の徳國寺すな各
の東條とあひえ服のね矢留は行、夜も兼遠の
故宅御料の森、火光をさう、津延、樋口、谷、兼光、
旧跡循の少佐、せよに生を立井、母址、母院
不遙る山中の草出師ハ行基の化臨川寺の寝室の
母、仙あの約定、ふすて石怪巖くづきもれり
あれより、人の墓すの、掛松其ゑ、清坂風煙乃

峯小姓の跡ハシマシがある。赤糸あると戸難津布引
うる名を立す。さるゝ都に遠き招あしむ男瀬女瀬
の妻ハタケは、も連ゆるねは、今多くちり名すら
烟の洋ハシマシは、こゝよ境のへり生す。清嶽駒ヶ岳
石の名をとどめて、富すむ肩を垂ふへ——
の多の齡ハタケは、蠻ヒの人民溝カニ巴女カニ、男力ハ男
猿ハシマシの多をとどめし良村背アシと伐坐ハシマシす
産珠ハシマシと運ひて、百家の用とぞ山と卸ハシマシて、洞川ハシマシ
張ハシマシとハシマシと、りとよハ高工の術よ訓ハシマシく曲家踏ハシマシ
の自在と、傍く他鄉の足ハシマシとあへ、神風や伊勢
のまほ、湯舟ハシマシはよ、もる倒ハシマシと福島ハシマシよ、開門ハシマシあ
て、渉ハシマシせよ、傍く、まく、管のうちもすり、
山村庄のあつハシマシきハシマシちハシマシもえ、清嶽明神
明井ハシマシ、惣ハシマシまほ利ハシマシく定勝寺長福寺兜ハシマシの
青空ハシマシの觀音寺の美ハシマシ、相家ハシマシの古迹根の井の
峯ハシマシ、大ハシマシとハシマシと、ほの浮石明井ハシマシと、金
橋伊豆河橋、清川橋、橋渡の橋ハシマシ岐山ハシマシと、お下
を分する堺ハシマシは佳境ハシマシに、多く風雅ハシマシす
と石のあら茶ハシマシと、十石峠ハシマシに移すは俳諧
骨張ハシマシの古瓶ハシマシと、も十石峠ハシマシと、多のおりよ
正月のハシマシと、年ハシマシと、本多郡ハシマシの風俗ハシマシと、益のおりよ
ハ本多郡ハシマシの風俗ハシマシと、牧ハシマシあられと、市と娘ハシマシ
巢宿ハシマシと、年ハシマシと、尾宿ハシマシと、幸ハシマシと、東都ハシマシと、秋ハシマシと、
様ハシマシけやきの枝ハシマシと、木と葉ハシマシと、四季に割ハシマシて、木と葉ハシマシ

行あふ生と未ひをきよしる不干瓢巻と草薙まゝ
跡文佳名あつて名向あの走と茅をて木川のま
風味文世よ起りうらむとくをゆきをまの流ほく
まえふと秋の紅葉ハ里に生るう折信濃
十郡に賦三一園の半ともうさんと口とをもす
扇うるうと終よ抜きよすよつ

四列亭記

左の西に一亭あり四柱亭と名づけ
濃い勢のうと萬と一との内よへまをなすを
一を入へまゆはつまゆる山のまとましすを
移文のまとましすをやまへばく行はまの
おにあまは縁をまくへくも山の信を
まく此亭の山の下立つて西の山の下
ま低の谷淡濃のまく殿とほそくも山の山
をくにあうにまの壁とりいきしハ垣
あきとこく論をとゆくを母の奥とすゆく方
の居とあと求る者ハ偏よ山のせに遠き宿室を
むくる者うつ笏と柱と簾と拂くまの余雪の
シと情じハ心の月星とぞくとくしてゆく
靈連の殿と烟まを攀ぐ山の霧とまと向まう
もあとといつれの堂をう猿もとぞまと國一の
名山ともも扇よとく烟をゆきて只聊とのよた

「そぞうつせ廟のこぢのまをすみとて富士
山とてやまとへ必ず風邪の人あらずす
山に入り人やまとむかねきけいつせりらじとみ
く殿^殿りへんもむとやけ亭のふきの山ハの風ま
とむするよして山寂寞とむらむ山にあらし跑て
旅と待とひふれ起と櫻に待てけんか
自由ハ名画と巻と舒とくにゆくとまくとまく
没体のやがも下視とーとて解書のよりよ求く
三字と卷と櫻に櫻くと隆むと清くと清
りりて千其あとハ毛の四毛とくのとあと
カタトヤ圓^圓の萬^萬にサシキムテモ聲の争う
あらすとあも其化ハ解くあとト一ト一ト鄙陋^{鄙陋}
愧^愧ま博^博うと解^解うと解^解うと解^解うと解^解
かくと解^解うと解^解うと解^解うと解^解

六林文集序

佛詒の世にけりとやと經神のあとととと
あととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
我達たとてとてとてとてとてとてとてとてと
ととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととと

あら本す小物やうもむよ尼娃を佛塔
くくくくすまつてちくにせの佛人とすすみ七
おはよーーは佛塔の文まハ術一風俗文達せ
けり年くは其体と字の者のうそあすとく
あひ基稀あうす人のえとすも風体てあひ
世のよど詐シタリとくとあると
摩ニモトシヘハ蓮のよく正へて俗中
ユ雅と失ソトシハヤトモき人の編ニテ相應
やうへるのりよきにナリれと曰寧國子
キと生じ茶を飲く事いふ如其位
ヨミム人い及よすやくらん東菴坊支考
性と清々含まきに語彙に猪母の掌
世男の一をのぬよと縦くとおのむちう引輪す
ニテトテ春ねの許六ハ物の姿性とよきいと詞と
飾りたるかくわくと卑きし仰げられともうそ
雅趣のよきにあそそぐと行の思ふと
人よ喜ぶとよきとて狗下駄み人ハやく大邊よ
肩りくとあらそくに人よきくとくとく其
餘碑とくとくと諦むとす只私漢の御ゆ古傳をす
俗の諺す人をうむと見ゆあらはあすと
と端の墨をとくとて俗をと新にとす主事
よくかくとすとぞきくとて調ひする文三章と
りの海に難うとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

文季章一ノに玉さくの鈴と櫻をアホ左
月と鶯一にてこの金を廻すにあら他ハリモテムヘテ
か州諸々其右に出しまれむる音を多くハ稀う魏
洋もレタリヨ猫に小判の耳あられもとて匂
少とせにあらず只狹の壁とすほりも
輪錠もキヨシ小序と求らるタゞく金葉の
契あくと絆アキサカアキアキ不才の薦めと
揮りスルモノに當リヒテモレトム又ざくもやあ
セテ墨役と商ひ家の繕子継手沙綱織物ハ摩
庫に滞リシタル入口の壁を簾もアキアキと
用をも店と云ふ人のまゝらみ不間とるわとも
宿主屋法相のト
オとソク始に一きみ壁簾と掛シトキモ店也
の便を抜けんやつあもトカラナテ序をも挿リ

輿号詠 為相至巴良

あきよ升とよせにあきよ苦勞の苦とまく
斧川のソクとよあきよの苦とゆうれ詩賦ニモ
一もくらへ湯舟に掛のソクとよて胡とまく
の煙鉢とくまくまくまくまくまくまく
風船ゆもおと降る風とまくまくまくまく
文季よもと富とあきよ家事にせひよ
そ人の物にまくまくまくまくまくまくまくまく
の連歌にゆるまくまくまくまくまくまくまくまく

店の賣物よ及びる。我の句れ以て當りて安
入多財主に人の賣るい。僅ニ一二錢の胡椒
をある者ありわしも店に賣物の人あきと見て
未句と惜りと詫に譲りて其を之胡椒と
高いき一袋と安抵そく汝く感せり
人の連款よをりく。こそ玉きゆうあれと號えよ
稱矣。くると賣子う俳諧に歌ふ。すけあ
あるへア春を破り室と詠ふ。此是年輪
の生と雖と云ふ。さてこれとあらう俳諧買
もは奕也も同つ。さる者とくよみりいじ俳諧ハ
おおぐく家業と。君の者とくよみりいじ俳諧ハ
第一のまことにうて。此の宣傳がよひ夷太風
も風雅と助けてつあよ俳諧のめ處す。即ち
今や其屋に坐とど坐くもかれば業と業也
藍を金とすと。猶も此をかみはす。我う唇
唇うち出で。藍うちも濃き趙と呼んでせん俳諧の
名す。まくあらむ。光の一宇も空

聯句

至る處よ櫻安へ即く。人多すよ。のよ。まき男
あきとあらむ。まうの。義の門と。強く
产生す。ちの。やう。ど。ち。生す。や。あらむ。あらむ。

そぞとお老僧の詠ひ事てより用詩をすいつと
はすひへと同へて近き方の空すむとあらも
いふに根向及ひす聯句せんとすくとて接拶乃
か句と唱生と好借る秋の音とやうやう詠歌の
ニまことに生と近き方の屋とよしりつゝやまハ
えのウアヒゆと送れしよまざくぬけよ春園の
あまむらそくとよしのよのよの僅よ彌々

接拶

雖汲水無葛

可涼風在蘿

庭草松氣色

山野月邪魔

長咄夜方冷

大跳盆亦過

酒醒慙嫁

茶済婆婆

擇日四大丈

懷春万葉歎

遲櫻留記念

借宿疑了法

換題試頗阿

耳言牽袖笑

口説入牀和

截^{キル}指^{ササゲ}女郎^ヲ誓^{スル}

沙^{サスレ}掌^ハ腰^ヲ祖父^イ病^{アリ}

移^シ敷^シ残^シ暑^ハ禱^{スル}

腕^ヲ曬^ス有^シ明^ニ蓑^ミ

濱市^ヲ初^シ鮭^ヲ貴^シ

辻^ヲ能^シ油^ヲ虫^ヲ

元^モ開^ス粧^ヲ寺^院

折^モ動^ク彩^モ溪^ヲ河^ヲ

ほうつし衣宿を辱^シあう明和のまよ^シてす掃^除

内^モ虚^シおも^シかく^シてうれ^シく^シき

山東^ヲお

手分紙

こういは恩のゆゑ^ヲあうう^シてまよ^シと^シ輪^ヲのじ^シは
漫^シをあ大考^シ。玉のあ^シが^シり^シう恩^のゆゑ^ヲうる^シ
き苦^シの多^シハ衣冠^ヲと^シ得^シけおと^シ一^ノ年^ヲ
そ^シせ^シと^シう生^シて^シるるの巨^大事^業を^シな^シ一^ノ年^と
情^シひの外^ヲ向^むの^シ年^ヲま^さむる^シもあき^シこ^の中^心に老^シる
あ^シハ捨^シてせ^シ玉^ヲあき^シこ^の中^心に老^シる
男^のまよ^シは腰^ヲあ^シむれ^シ、人^をく^シく^シき^シう^シら
ち^シ一^ノ年^ヲまよ^シて置^シく^シう^シ、お^の昔^ニまよ^シく^シう^シ
年の^シを^シまよ^シて^シ厄^ヲ拂^シて^シお^のう^シう^シう^シう^シ

きのうもくらゆうすにむ／＼はまのあらうに
アモミタハシナリトマリシテアモリ
ニカシヒシキ侍／＼サヤヒツトモアモリ
ソウシテアシキ年次の大／＼おとトモクルアモリ
ノリカシヒシキ侍／＼サヤヒツトモアモリ

モモロシセシムガの春ハシタヒトモアモリ

モモロシセシムガの春ハシタヒトモアモリ

一之の侍ハアシヤ侍

モモロシ塔サヤ塔

梅ナシ福と恩との年々塔

八百塔

二十九ナキリヨナキ芭翁の泊リて酒を連
上主に之とつゝ子孫としめ、俳諧の祖師
詩歌狂歌の人ハリコトモイ俳諧師ハ乞とちも、我
劣らハシタヒトモクトモキモ多矣のハシタヒトモ
あるハ門人のハシタヒトモカシム、乾坤に湯うれ
キ系里うるづ稀ノ耳目とせず也四ノ社ノ
うかやつれく美に之とすく人のあくをもとれども
うとく人のよし、ソレシテ大いにうふうす
供のうとく人と故ひ底のうふくとよへ候事乃
うとく人と迷事と云ふのうとく人のあくをも
うとく人と迷事と云ふのうとく人のあくをも
うとく人と迷事と云ふのうとく人のあくをも

とくと俳諧およくよの言ひ方のうどいよき
くせはようぐくへり我ばくもかうじとゆう
うううううううううううううううううう
あをこえと絆をよおじきの一つうーーあ
とくとくの者うううう場と金のまとひに遠く
あまと大根とて来たにあくまうきをやまと店
ううううとよーの多に不直うううううう
うううううううううううううううう
ハーリ石のけとほやしと風船、ハ輪ううううう
うううと推量ーー一辺とくく舞うううーのふ
きとあくとよーいだと捨へううう

自在鍵頭

世す自左鍵と呼すあくまは爐上にりてく釜釜
釜釜とつまむに延端をゆるゆるゆるゆる
一用とくとく行とまむのうううううう
左鍵とくとく釜と路うのうーあくの老衰のう
ひうううととととととととととととととととと
ーくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
まれ巧あくまのう甚うう右にゆうとゆうと
のうちうう一章のえとまく深一仙才又妙う
あをとーとととととととととととととととと
のみの肴を波文書にたとえとくわとかよ文華
を締つてきのうすがー折れやの多能あるを

ニ入用の調文と搔きすくらまうり、杖にて走
駆け棚の氣を驅生——簾にちくら馬の事と拂
拂て石公の松下の寝をかう仰いそ伯孺、松乃
ぬ云と盜じよ候あう先ハ折——折ハシテム
ツツの木のりくすすきとくく卑——卑——
木とむすびてあくやくて折と云——神子
きくきの破きよほよほよ擇蓮の事と備さは
西後、神をゆきよすとす活潑の聲のりよハ洞門
、活奥さ臣中も御く干つ——されどハ所
ニテ御くみよハ經——とて捨すすめうをアラタ
モレサクアリ——とておうとアリ——りけめのせつり
おれりと被射よの自生健をめと本まへ——事論
とき——訴よ乃づ。射まの傷子隔て解の多がと
くくんよハ殺念多の割きよらすすくと拂とさへ
自生健——せよ己、名と呼ふのちよ

文友句歌序

やあく時年、季の社中、度々おまくちとト百年
の後、おなじに、の句と石に附不朽の文句也と
筆く——以約文もすとと度もと海も重持
附すよ場くちもとと剣伶、墳に酒と灑く
とお足洗よ塚の穴を詮く——徐君のゆす掛
まくちく人ハ軽感——ともみやまくしゆほ
のあくも固くハ生もよ其事あきう——たまく

まのあらうとてほひ一まれ御れむ處すんと社牛
皆云生と死るにまのほもア度々其をばはす
トナ我曹の事よアナリナヒミと念ますと
そくんとまくはにひまと云ふと云ふ時ノ事の言が
主生堂の様すまきせきあう一基の石と建一堵
の塀あんあくまじるえきあう予にけりと達
一句を清り實の少斗とよらうすあ都とあ
清向才の後すハ行ちんすやせかみあの御禮寄
と早計と聲よりかへをそも儀を奥
岸よせたまされ匂うしとしとこゑのナハキ
のあト村う生とせにあくの邊すハテキアハ
あ細の御算す異むも御おおきうへ
風船す心ある人の詫うらをまつし年くまか
草生と白氏、歌すハヨウクハシハラニモ
あくとよまよ向の一句をあうと

我とその塀の擇除や事の事

而か唐江

カウニヨハ鐘形とすまく神鬼と迷ふと
ミ寄とすらて眼と髪ドレ臂を擣けく長剣をす
血とは冥思ハ參れつへーされどもさうきを生ハ
用ひテヨハ福のサハ怪我を取つひあすうてあり
ハナツツキタマホーかくとて我國のあくア一年く

の音節うちよハ即ちうき歌行も耳習ひとゆづく二句
のえを唱へ至るゝ人を専らうせな歌ハおとと遙
ちう徳のサハ呼に酒ひりう至の香にうてへうり
狂すうとぞうう色すれどもまじめう毒あうと
老後の音節をうてあり徳ハ日よりおとある異
日ニ跡一さぬともありハ殊ニ酒と好みと酒豪
の名ととくをゆのことをうへ思ひや人のうじ思
とな風うよあまくゆのをきうめのとおとをうみ
詠ひうてまとする者とくよすある一とおとす
詠毛りいあるとくとく象とんむなき世ヨリハこのまづか
産のうすうとくと傳りまくくとくとくとくとく

樂晋路詩

晋路ハ竹内基之男ガツニ四半引の事
正月ウアヒシテモクミカレモクニトシモト

スルヒ多々シテ感一と経と目て戲て
門人と

不候少少年のじうり離情とゆきを憶ふりと病ハ
やまと生と幽居の友とすれど何處にゆるるもあされ
ともまたに年々ノキにはひとへハ申ハセマセ
敲推と同守もあれと仰方に仰ると暫いとておの
彦安と告ぐ固く辞一事わざさりと数年六十言葉
け身子年二年大辯よ脊とくへ家と喰事
くまとあひたよと甘ソヒカトモトアハ行ひや軍
のをよつよも起よう小法師ハ月ニ病ぬ其の心ある

うもさうう序ニ射トシテ一宇の間とあまし我
わくと方せするは切実上の門牙の人のうらやまえ
家辞セテ約をきけりあれとおあひ
先とあひすう政人ひきやお教に原うと況や
俳諧の旅とを只法式ハよく草よーされどももるよ
立毛モ法式ハあつてかへー法とよそに誰の
穿鑿形一天下の公私モしてほふ人のちゆうとす
とく秘なる法とくらむちあれ世よ秘ゆロはと
ちよへ行くややす用意の公にすう或ハてよ旅事の
かありまへる當初のゆうて我考めくらむけ
ことかくきむりとくきいとあるすの只まくる
よ止りく地よ傷をとめと一をとめくろすがりて
わらわゆうあり所ハくちきくあ西と指所の
たとく詩文書とまよへの秘ゆヲまとまゆキ
一ツもあくちくくもよよりくつまよとよまよオの
うをとめとてちと別よ秘ゆとせよせしに秘ゆ
付持とくすのくせのちよ拂うとせよせしに秘ゆ
とせよと秘ゆロはよよよよよよよよよよ
玉淵中常ハがよ序アリ孤狸のまよ達ハヨリモ
俳諧は混まくらむか年朔旦キモキモ押店

儒士元

等あ是井欣

おきみくまきみ齋のあくこくうとあく

うやなにすがるまのりゆきを傾く身と
え秋のおひまくはる國のあのかまくらのふよお乃
たまきせにこち者爲にあら様の如くいそ
づき壁のこゑあつすゑりの常よ笑むと
茶清とせ葉のたぬき酒に者のまゆのねも人
まほの名ふきてまきとすくふうへるる
あうえあらかじめくすみとまほく窓のあ

うれ

三月と五月の十三日

夏ニ空賊

秋のほむ指の里をひとのアキモはつるの肱と曲
くるうのまことに。き二家の争いとある一人、
あまくして跡あり算計の如くみつゝ旨命先主
と名のる一人ハ面もす頃まで。宿あるま幸若士
と称してすてゆ奥さまいづく碎くやし生もす
近くおまことの店士の前に立てもあくを今一桶
の内よ車くわと我すうとうに横こりゆくやと古生
え我もすうとう生まのりとぞしよハらす、
御き農まのまのとすあれと芳郡平、あ門ナ竹
篠山の邊湯をうちく二月中旬の吉日献
やうひとひよりうぐのすはくい山河の里到
けた政治のとくう價のアヘンをもせりて
のうて東都より勢ひとすやうあくあらんと

りすのありてどうぞま威と傳わるる御用よハ蠶尾
の端とくとくあれりもく友人の佐久の邊は倭とく
故に送る怪の付と瓜期とて薄よ稀よとのと
リ、一勇士ニテ高きに並ひく夏の吉兆とすまへい
つと一あすかしに運びにあみ御らむと多理の
蝦蟇をかうて余と詩へ妖怪ひよいとあらふ
すり一條幸の詩吟よ怪き毒と合ひ淫靡よ占
りを行ひまほれと踊りおと不祥として場所出
ヘリキ山嶽のこゑれりうの瓜煙と故人の初
モツツ行とく一あくのくの糟よつけと
と讀むる音はあくさりとすり 一いつやうせん
の村の瓜煙新ハ黒リモツツ行とく
タクナリとハ平家めのら達と似せるやうも 一足立
オと省 一一味喰るよゆす味しとくとて幸に田焼
の佐名をそにふとまとせりとくとく黒トなま
タクナリも株とすりとあますり 一わづけ
ちとふらを瓜の蔓にサシハあます只已ヒカヒカ
行とす卑のあましや不用の穿ひとてうと
うこまひはまくとく人を繕ましと捨られと畠の医
とぬや黒うじやみねくと麻と抱く席をうつり
と下すうの姿坐らうじゆくとましとくとく
ま舟ぐるまく清掃の仕事とて棚がよ張り

祭嘗花文

うみ秋ハモ利浦をもすと同の島よ當りとひま
モ禮をあらむあはせの内幸よ友よく一昔をさる
まうおのあきにわうれどるうも文場すよく一甚世
の人と折るわきこまむ失セキモ去くのつゝ者。よ
らすおうとよ只そくへ斗おつと細ヒ七十を越す
往健よ米布ハ七十よ陰とすのびよかくす
只よめくと七十のうよあくまくま教入あく
あくまくへきよすうきくすくすよゆを織りゆ
本のむせと中の清きよれ遠くかくの翁とあらき
やうくいとく只くうよみのゆ向と高くはうよ
まうじ仲秋のあたあるみとくま

送笔墓辭

山教もす一あく文科の月三とよすすむ
あさすあけちやどといひくる筆墓を送る其の先
の信濃路まよがきかふえ友梅うぶのとあり武義
ユ左官店のとて強年あめえあめくとあく一と
何くくうづくしよ候のやうとすむ情ひよ一行
くめとすく行ほよすくかの差のあくとやまと陽闇
の一句をよそく別く社すまつめま

編者名すくそむの道あく

煙雨詩

風月堂と訪りしも一扇の山家よが強さむ
一軸とぞく感あるの絛り紙とまと詠く一句とぞく

身の役や身の役あとぞなせむ

六林いそく風月堂ハ屋府本町書林ちう此多喜芭翁筆

ウ紙の比らす斗^印一句と殊^{アリ}其跡ありと今此を模写

印
書林風月ときし
まをもやうとままで
きうきうきうきうきう

縦力すみ斗^印横一人四寸五分半
子様の一枚

印
書林風月ときし
まをもやうとままで
きうきうきうきう

是貞享丁卯冬のゆうり今
大明八年戊申より百二年を卫

タ道ハ今之風月堂殊ゆる其登

きあつて其集の作者うり

印
書林風月ときし
まをもやうとままで
きうきうきうきう

丁卯霜月^印
タ道^印一通

絵像文

人のそぞろして抱くある一袖といへく上よもぐり
ち添くあくまくはけぬるハ柔姿とぞせらるうううう
タ道のまに縫も捨くえーとをもあ面ノケハ
我多生す」うりなハけゆううせあアムシカウトと
あきターケ且きうく^印聖^印をあゆる内^印の傳の事
はまかれてよみぐる

金剛^印するふあく^印と抜^印ハ出く

サ秋の戸棚^印刀^印斧^印や搜^印も

ウとタクタク^印とい^印ハセレ

更幽亭記

三石^印の山里に代^印草^印と樹^印と篠^印と家^印と木^印ハダ陸

タキノ原 張氏、邊幅は仰そ多々富ハ國
我令宿の氣に只け家うちのありて上清寺子
常にもろりとあひ不自由ある山中あらにての風
風物にすくと客とおもろ牛よ実山るの宝箱と
水すハ禪よ見度ぬ隔く名むよ花の茶と真
く一室す幽趣とすすりサはすとすは山巒に邊
して伐木の丁ぐる平さに傍るー山亭よ号を
呼す更幽のニテすとすすめの志と意にちふれ
く神處ても訪すすあらわせむかむよへ此をめ
虚あらきとあらー

つのり一序

五十九
業が情といふ人ゆきと送りくるすうか
漢よ能す人のへりゆく生す我多のまよせ大原ひまよ
ア名とすひねよまよひよまよほまよはまよばらう
あひてあひとつみた原ひまよちのりうなと送す
く和也よ自由の儀とあもあもにまよじらは出く
ひの乍ちよと酔くと酒くとつまくと
自らとおとく人の目と華一つりと一生の少母す
あんよ生すと假名と號一太原ひまよひまよ
すすきくら一せんよまよよみのむし時く人の智
すくくすくとぞきくかくくくほくこまくしと墨の
墨よ漆してはるととされむかくのすくべらり
タヒタヒシテキサキ漆ハ仰すうれどもうこの

種燈と我家の山林と畠一ロよりひくとあらへ
はけ一本とにくし家めよ綱の底むけを半格もみ
じへまくす寄りる假名せあるが、其の辺津の者に感嘆
の聲う戲生と云ふよすとあるとある

金賊

津津の老農の老年の一喜一悲浮漂すなす。
かづきと不吉と稱をりとて大邦の祿とぞと
まづやのやうく一とくと渴りと飢えとて身に傍
アミターラムととくととくととくととくととくととくととくととくととくととくととくととくととくと
ア魚と生きる事無くわざと弊者の扱ふまくと
世話をりて身を捨て富に歸のむうとあり又其の
年中は皆あらゆるふくある店先にうちて郭巨
を縛りて死んで、死んで金をもつて棺生せり
とをばと大よ歎ようのゆゑ是人ののみ一死りと
とを又塵俗のせうやまくととす乃シ子ゆ
タ翁の比段かうりげよととをととすゆ
レレ人ひ草木うろこすくせんくすととすゆ
キ奥の深處へとほの念へとおもひとくとくと
とてちいぢるもあらひへとうにそよとくと
けいとおとすやみのむの折よとくと湯と溶一茶
とあるれ外あるひまわす瓶舟を林たまきのおり
拂と表すよな支分の用とあらわすととくととくと

かくおまに寄りあはる事へまづて金のを
守るべ年々黒くしては金をたゞよひすまうと
渠と呼むてはくと金を渠と呼むて渠と呼む
うかはく我うちれはせのあはる事は渠と呼む
玉井をくうの御れとては金とて渠と呼む
まうり渠と呼むて渠と呼むて渠と呼むて渠と呼
さく一姓の姓を何と云ひせんては金と呼むて渠
義をみて渠と呼むて渠と呼むて渠と呼むて渠と呼
の渠と呼むて渠と呼むて渠と呼むて渠と呼
き渠と呼むて渠と呼むて渠と呼むて渠と呼
すつしくちよ名のすすみく茶金がり
すりやく茶金がり茶金がり茶金がり
ソラキノ年と傳とてモトモトには茶金がり利
すすりて一との老農夫來てあくとくとくとくとく
譯す言を

与銀鳥文 疎澠別内は更當事立之事

机上は機一組鳥ふハ七五アリ多ひ家産の長あらじ
用ひすむと御手控金アリとせんてあるものハナリ
ヨリニ生ありむと生と生と生と生と生と生と
生と生の計はきとて譲りあふ小屋ノ棚と持つ
媒持の厄介あつてとあつての界は宿もらひ
するが故とすらまづとまづとまづとまづとまづと
くのく

漢和モリ年序

俳諧の漢和昔人より也多有するハナトヨウ俗傳
ある一向よ字と云ふて多くはちもき業者にて假令志
あくへも活式すらざるましくかくふくも辭あれど其
立手あくへ一室よあき齋の主人へひきにだよ天勘
手と勘手とやばうらむと鑑れ中すり古き一帖を
ほりとぞ假手よと加くことぬくに料せ詮極めて
齒のあき立手も嘗て安き一生と暮りてよりもよそ
おつとやかの俳士のほくと我ハサムテ一つ完の私
快あくへ一握手の末よ便せく序者と化く一語
と贅毛

香木記

むし龍の絵とゆる人玉の龍扇と姿毛を
タラシテゆるよ信あらわに感意あくまうあき
あくに我齋りに花井某次く香乃名とゆみてをま
鑒山すくえーあくにちゆすちく待てる臼あくい
年経て底くの破けすくわく多く不正き肩
乃あくりとくらまくと金毛にすくえにある口にじ
きぬかる香れ家よみぢワリとあらじてゆれて
の當に焼くのあくうとひれくらむに實
本の生身とよのづれくらむとあらじてゆれて
たうそりとまと向よくうらむ赤梅櫻よまうね
名うのまよ花井臼と呼べく柯亭竹の苗焦尾

の事とおちたつゝもよし通すちらあつし
まよひてうきよみをうきうきとひと日とよみ
物のまことひてまのまかひゆるよ御ふとる
えくの月の牛すら草と拂とまけをすやまほ
けぬのああやあ

日の香や月の鬼ハキマヒ

百話亭詩

全くの口と滅へやうて居るのうへとも只りよ
人のうへてすぢまはあつてうらさ生まサ平と滅
せらうやまはなへ年へあきまへよの匂もすらに非れ
脚^{あし}のうきのなはにくはやよとあるあひて非れと
度^{たど}むとく。庚申雪の音の妙く耳とくにまづ
うそすがたを聞^き。聞^きうそすがたとくあ一き。
捨^すとくふよ撫^{なで}をあいのうへてすくの音を
歌^{うた}色俳諧^{ひが}一时の詠美^{よみ}おとを重^{おも}くる而^は詠亭す
まことうかうのうれ^{うれ}もあいしろくせに鳥鳴
とくすうき^{うき}のうれ^{うれ}もあいしろくせに鳥鳴
の後^{うしろ}うきにうれ^{うれ}をゆきを散^{ばら}に満^{まつ}る時^{とき}うき
歌^{うた}の生^{うき}とくへす百話亭のまこと^{まこと}くわ^{くわ}の
百^{ひゃく}語^ごの合^あふとも訝^{くわい}す。百話亭のまこと^{まこと}くわ^{くわ}の
女の首^{くび}うりぬかとくとく失^うる。お食^くの時^{とき}と
寝^ねああひやうて墨^{すみ}ふ擣^{こね}す踊^{おど}り翅^は枝^{えだ}動^{うご}き出

経棚のあづらへてともかくおはまのうひ
玉の妖やの出でよハアツトモヒタホ出でよリト
ぐくの彦リトナリヒ亭よ一章の文を傳せ
例の戯うとすに仰せますあせのうへ
さる万詮山内のかくと死んで後舌の者もある

ア

経佐翁洗耳序

アヤメの宿あるまの金すくい佐翁の里に世
あわゆる水鶴塚ありすれど里方よ甚焉と云ふす
あす其句と強せ一地と云ひ地ともすみあす河原
と云ひ塚と墓よりゆつと草す人ともよまむ
人ハ故ちや山里にえき道士ゆきうり山を草
みをもとすのと生涯夙願す哉一情ひ一丙申の
冬享年古稀にてと添え卒よお墓のあときぬ
孝子洗耳高傷のあすう遠近を歸の挽詞とて
させに一帖を遺せしとて予小序と書りる嘆乎
我かよく不キの擇標々ハ行を行ふる
あす高傷のとめも縁すとめとくもくは
求あす國く辞一とすとくもくは已よニ斗あり
りまくのれどもじつて一句と寄せんといひ
四吊ひ日ハ亦よそもよしとぞ高里の教よ曰
清安うよのほれよすのひのうゑとひ

かずきのうへて此の日矣

あ雨亭記

丹波の市中はひまくありとまことにせり草と
鶯と業とし表す。四五年の暖簷としきせの風
よあひをせらる。塵の行こととを申すとゆふ孤松軒
の名と室端の匂と呼べてすむむよあひ詩と誠
文書とつとてこよせの人とよよじせの答あ
ハシマリ史尾福ほのまづて南尾とていふ
うき野苦痴体はおも名をばくして草と壺とんびと
そくと安くとよわぬ今あるとほれかへてす
あすまいとくほる。我、迷栖と敲とよそ
きよめとあわうるし。我、漫遊の空とよむくわ
くわに晴れと晴れとあす。因縁遊くよ擦とよく風あ
因とねり日が一とけのゆくとくとくとくとくとくと
きよる。鳥と鳥のとくとくとくとくとくとくとくとくと
そ跡とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ねくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
きよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
試とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
されとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
上國せ臣のよきとくとくとくとくとくとくとくとくと
父祖の様とほく剥とくとくとくとくとくとくとくと
芋とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

化くよく屋と名へるゝ如一御のまにあすて
まね葉の原とあゆみつゝ妖のほと猿魯波の
山神と尼へるゝ蓬生のすゑに空と言ふゝ世の外
よ餘齡をもるなりかの因縁のこゝに煙風
すすはりとまよざつゝ人や穴と喫つて作る
栖す雪見きやし今ふ叢よなむりうけと宿つみの
用と妨らぬやうさめとすう駄と塵室
のす孤松のあゝの圓鏡を尊ぶるへ世にすらう
穴の狐をやせんくとしよひ日暮布よ山椒の深茶
とまげく我を悲ことひよへ

方十園記

あゝ名すく方十園とよすすむよ十すすむよ
ゆすあくとえすあくとよくの向地すう室よと
もあうとおとすりす御うつりのよれひとて筆書
書じつまくはきせのへんといひき字と筆
は圓とよきわはくこよとよとよとよとよとよと
とへ一叶すや安水に年同彌月をせまつひきま
ひよちまゆすすすすす半持庵とよは

指草堂記

年とおもひて好すの漢ありあへてせのまを
りよしとく書坊のうとあうけせの高洁のま
くちよ中よとくとくやまきすうひよし店舗

て秤十本齊する事多し又人船士よおつき
と戎船の番りと聞きとてかく詰まつたるを、
すむお家の人へはいきゆすわざるゝのみを、さうなり。
えどるとき店舗はあはずむ一玉毎の借金と税と衛費
とていやうせりハ三種の利と争ひもうち無事
商取のうへててうちまにあめいといふやあ車
よ櫻と赤ひくは山廻りとまと荷車の上の方を
へき生移すありてうてあるととくわんとそらに
捨棄と定めはとてまじきとしきとあら
くとて手と脚とをとめて來じされりやすをま
とをじよまのあと表せりすのを代わるの奥の海の
手とてやあじよはふの井の底きをもじと汲く
手とすりとくやうの天にさゆりとくらぬくと造る
手と解けとすけりを快のまことうじとじつと
固辞されとむうけいとくとわれてまれす、神と
ひかみとまくとく駆取次のまくととてちと
坐と計とせうして居る

送別書き

西濃の里にて世人櫻の木と求るま送別書
の字と名づけむれどとてかくよつてといふる
謂ふれとく其ゆきをうけて止まつたはすらと
いひ京あはれりう岐嶺の大河清く流わくとす

ある義理と生れとちうて西の角かや伊勢方より
近いの山と見て巒とつねに甚遠く又ちうがん
ひつき移ふ年月とりどりのうちにうとう塔下で此
を風塵の空きうへて書よ書かれて月と舞ひあり
四時之佳麗りひつゝすましくらと揚てはけ石と舞
せんかわは極きく猶未時までのこなる明秋ハ稿業
高に富一多はあまきに深き詠只月のことを
送るまゝされど又一字を添すやむへども出る
うすりゆきとらむと萬の送りとほよハ萬
へーきとひそく山字と字を濃きと淡ひくや
所謂東坡の亭の裏金匱の筆走りしもあら
よもくえき

年旦の口号

五

年號にぐくかくうと樓ひと年號と
くくの句いとくわくと絳縣の句の
ひづきあくくはあくへとあくと段ひきと
よもくえき

よもくえきとしむとせんもすりあ
つきくよく面周むお

松林 略引

金森氏桂五子の庭よ一様のねすりけねようと我
ヨ一詩を来るうすけよおうりうとよ益母のりう

うて歌くせむる年すといよへー少初の主人
とよつてうき半足とまことく物ハ序す累
シテ、歌ハ向も清々しくかきうるといふ
あは桂子の主めりにむかひあくびとひらと
よくおほきうをむかひ及づるうじしまくわさの
歌とおはすうすかきとし曲うすひきうの唱歌
を四句にてて能多の韵とすり自がつけたもの
と嘗て歌あるまじきを多く歌う曲の
あらゆるの歌うて多うおはすのえをあらわす

うめうめうめうめうめ
人とちよ年うりが
人ひす代うり

補逸

布袋庵風寄句集序

風物と草と西東をもるすの布袋庵と詰はまるに於て
訪へり句あざるが一匁あれど詰せらるゝに於ての
詰する者三百金以上と一袖に済りうるを思ふま
年の憂愁かきをあらへ丙丁と近きて池魚の宋人
け舟子よ乃ひ年あるをいはゞく一叶の鳥舟をさ
えお情ひ一恨ひ一あく一深く悔み程すむと
よむするをとひ出くやうひつゆくの一帖と起り
さるも其事と無くまことにとくられ、てくわねりす
とふとすあらの年うゑも甚しひ徳つやうに傳
キリて生れたりあつやはりくうえ持つて立つて

寫

是年一月三日後下サニ

序と清せきとしとすとしとちとやまと山のまへ
煙けふほよ生よ巖み草一とふと詰融をあらざこれ
より向と多く一とふとてやのまと煙くがのまし
行つ海くの塞をもつてのよしと十斗のまづ狭く
後すとしとすとちと

老のやうりまとのてくまのほと

昭和九年庚寅に集る古稿が一年のあせを義乃
居をめにすまとくる

早稻田大学図書館

011688991023